

(大阪東北部)

- 1 所在地 一 大阪市中央区船越町一丁目、二 同区安堂寺町二丁目、三 同区法田坂二丁目
- 2 調査期間 一 OS九九一四八次調査 一九九九年（平11）  
二 OS九九一五九次調査 一  
三 NW九九一三三次調査 二  
四 調査担当者 一・三 黒田慶一、二 辻 美紀  
（財）大阪市文化財協会
- 5 遺跡の種類 近世城郭跡・城下町跡  
（大阪東北部）
- 6 遺跡の年代 室町時代  
→江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構 の概要

大坂城は天正一一年（一五八三）の豊臣秀吉による築城に始まり、秀吉晩年、慶長三年（一五九八）の

「大坂町中屋敷替え」によ

つて大改造を加えられ（この時期を境に、豊臣前期・後期の二期に分かれている）、その後大坂夏の陣（慶長二〇年（一六一五））でひとまず鳥有に帰す。徳川幕府は二の丸の堀（現在の外堀）外を市街地として開放したので、今回報告する三地点はいずれも江戸時代には城下町内に位置する。また下層には難波宮・京跡、石山本願寺跡などの遺跡が存在する。

調査地は谷町筋から西に一四〇m入った船越町と呼ぶ両側町の北側の町並で、豊臣時代には惣構に位置するとともに、飛鳥時代から平安時代前期の遺構が濃密に分布するところである。

木簡は二基の土坑SK一〇一・一〇三からの出土で、いずれも江戸時代前期の整地層上面からの掘込みである。この二基は敷地境の南北堀の西側、堀からわずかに〇・四～〇・八m控えた位置に、長辺を堀に平行させて、一・八mの間隔をあけて南北に掘られており（SK一〇二が北側）、有機物と陶磁器片を多く含むことから、ゴミ穴と考えられる。

SK一〇二は、長さ一・五m以上幅一・〇m深さ一・一mで、青花皿・伊万里焼椀などの陶磁器、長さ一〇cmの亀甲文の絵柄をもつ羽子板などとともに、木簡は出土した。一八世紀前葉の土坑と考えられる。

SK一〇三は、長さ一・七m幅一・一m深さ一・一mで、底部外

面に「めし」と墨書した土師器皿とともに、木簡は検出された。一八世紀前葉の土坑と思われる。

「(お)めし」墨書土器は、大坂の鳥取藩蔵屋敷跡から、「おあみた様おめし」「にちによおめし」などと書かれたものが、「(お)しる」墨書土器とともに多量に出土し、仏教儀式に使われ廃棄されたと考えられている(豆谷浩之「墨書土器から垣間見た蔵屋敷」「葦火」八八(助大阪市文化財協会一〇〇〇年)。「めし」墨書土器が仏教儀式に伴うものとした場合、「八講諸調」木簡一(2)との関連が注目される。

## 二 OS九九一五九次調査

調査地は、豊臣氏大坂城の惣構南西部にある。地形的には上町台地の西側斜面を東西方向に抉る谷部に位置するため、地山が低く、周辺にはこれまで調査がほとんど及んでいない。現地表から約四・三m下で豊臣前期の遺物包含層に到達し、その下面で炉や柱穴、柵などを検出した。

木簡は、豊臣前期の遺物包含層(第七層)から、青花・中国製白磁・瀬戸美濃焼(天目・灰釉)・金箔押し瓦などとともに出土した。他にも、墨痕が残る長方形の木片が一点出土しているが、内容は不明である。

## 三 NW九九一三三次調査

調査地は中央大通りと上町筋の交差点の南西に位置する国立大阪

病院構内の北東部で、豊臣氏大坂城内であるとともに、古代には難波宮西方官衙、近世には藏奉行・金奉行などの屋敷があつた場所である。

木簡は、平面が長辺四・二m短辺一・六mの長方形で、深さ一・五mの豊臣前期の土坑から出土した。この土坑からは、木簡のほかに青花皿・瀬戸美濃焼皿などの陶磁器類、軒平瓦、鎧の小札などが検出された。

## 8 木簡の釈文・内容 一 OS九九一四八次調査

### SK一〇一

(1)  任  思  〔似カ〕

SK一〇三

(104)×28×1 019

(2)  「大坂近江町 長浜 〔屋又カ〕 右衛門殿  
八講諸調   つほ一ツ  
○罪  忠  ○

「五大力井」  
○  
○

」

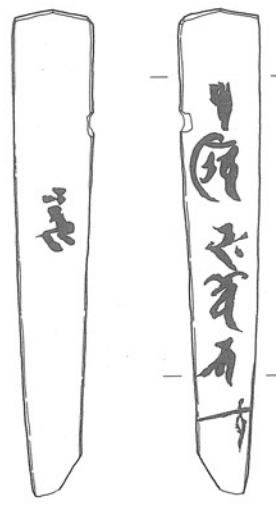
94×41×7 011

(3) 「布

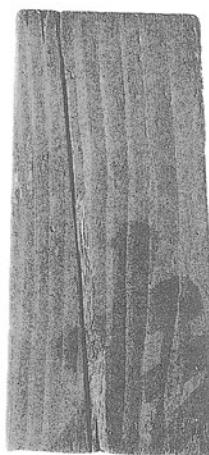
(175)×(84)×7 081

(1)は、柿経に似た断片で、下端部を欠いている。但し法華経には

2000年出土の木簡



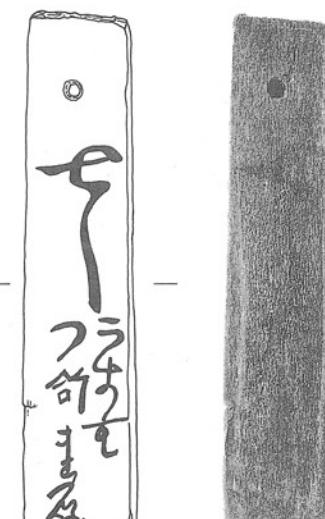
二(1)



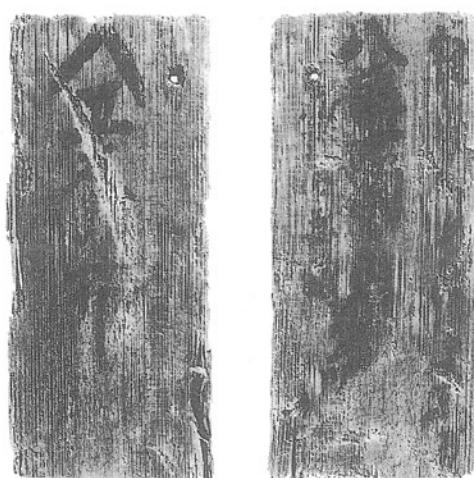
—(3)



—(1)



三(1)



—(2)



三(1)

この文言はない。

(2)は、法華八講関係の木簡である。左側上下二カ所に釘孔と思われる小孔がある。「長浜<sup>屋又カ</sup>右衛門」は文献史料に多出する長浜屋又右衛門（塩村耕編『古版大阪案内記集成』（重要古典籍叢刊第一巻）和泉書院、一九九九年）の可能性が高い。長浜屋又右衛門は延宝九年

（一六八一）に、越前嶋（縞）を扱う布問屋として名が見える。近江町は江戸時代から明治五年にかけて見られる町名で、「宝暦町鑑」

（宝暦年間（一七五一～六四））には「高麗橋東詰一筋南の丁、骨屋町筋より西」とあるから、船越町の一筋北側の通りで、やや西方の現

釣鐘町二丁目にあたり、当地からは至近距離であるが、同一地ではない。

(3)は、割れてバチ形を呈する木片で「布」と大書している。看板の破片と考えられる。(2)(3)木簡の共伴は、文献史料が長浜屋又右衛門を布問屋と伝えるだけに興味深い。江戸時代中期の大坂城下町での宗教事情を、特定の人物で語ることのできる、極めて貴重な発見である。

## 二 〇〇九九一五九次調査

(1) 「<sup>キラクバイバ</sup>」  
・「<sup>ウニ</sup>」

(146)×24×3 051

(1)は、上端はゆるい山形を呈し、下に向かうにつれ徐々に狭くな

るが、下端は欠失している。表とした面の二字目以下は、*khi*=キ、*rah*=ラク、*vai*=バイ、*bha*=バと判読できる。反対面に記された一字は *hun*=ウンと読めそうである。これらの種子が何を意味するのかは不明である。なお、梵字の訛讀については、千手寺の木下密運氏のご教示を得た。

### 三 NW九九一三三次調査

(1) 「。七<sup>月カ</sup>」  
〔こすカ〕  
□□□□□

103×22×8 011

(1)は、荷札木簡と思われるが、墨痕が薄く判読困難である。上端近くに小孔をもつ。左行一番下の墨書は花押の可能性がある。

(一・三 黒田慶一、二 辻 美紀)